

法蔵 334号 お盆号

【順信寺の予定】

*八月十五日午前十時三十分より・八月十六日午前十時三十分より

「孟蘭盆会法要（うらぼんえほうよう）」

*八月十七日午後一時三十分より

「歌登地区出身戦没者並びに全戦争犠牲者追悼法要」

（この法要に対する御志納はご遠慮致しております。

「人は誰も皆、温かく重たい存在である」。御焼香くださいますようお願い申し上げます。）

*八月二十日午後六時より

「万灯会法要（まんとうえほうよう）」

（万灯会は、本堂・納骨堂で読経いたしますが、満堂となり、今年は新型コロナウイルス感染対策が困難であるため、誠に恐縮ではございますが、お参りを遠慮くださいますよう、お願い申し上げます。灯籠につきましては、お申し込みいただきました分全てを万灯会を主催いたしております順信寺仏教青年会が幌別川に運ばせていただく予定となっております。7時頃より幌別川に流す予定でありますので、ご覧になられたい方は、直接、歌登橋の方へお越しいただければと存じます。ご理解、ご協力の程、何卒よろしくお願いいたします。また、天候等により変更する場合がございますので、御不安の方は、お寺の方へご相談くださいますようお願い申し上げます。）

「亡き人を 案ずる私が 亡き人から 案ぜられている」

*八月二十八日午後一時より 親鸞聖人御命日のお参り

*九月三日(木) 午前八時三十分より 大掃除

報恩講に向けて順信寺の大掃除を予定しております。御門徒の皆様のお協力をお願い申し上げます。

◆『お盆』とは

お盆とは「盂蘭盆」といい、言語の意味としては諸説ありますが、「倒懸」と漢訳され、逆さに吊るされたような苦しむ姿を表すものとされてきました。

お盆の行事は、「仏説盂蘭盆経」というお経に説かれている釈尊のお弟子・目連尊者の物語に由来するものです。

神通第一と呼ばれた目連尊者は、亡き母を案じ、神通方によって母の姿を探し求めます。すると、母は餓鬼の世界に落ち、苦しんでいました。目連尊者は悲しみの中、何とか母を助けたいという思いで、食物を母のもとへ運びます。しかし、母のもとではすべてが火や炭に変わってしまうのです。どうすることもできない目連尊者は、釈尊のもとに行き尋ねました。すると釈尊から、安居の最後の日、百味の飲食を盆に盛り、仏や菩薩や僧などの聖衆に供えるよう教えられます。

目連尊者がそれを実践すると、母は餓鬼道から救われたといいます。

「自分一人で大きくなったような顔をして」と子どもに言った親が居るようですが、目連が何故、尊者と言われたのか、それは自分がここまでに至る過程で餓鬼道にまで落ちても支えてくれた世界があったということに目覚めたからではないでしょうか。

自分に願いをかけて、支えてくれた世界があったことに目覚めることがお盆の大切なことではないでしょうか。お盆にあたり今一度大切なことを頂きなおすことができることを願います。

(東本願寺発行「お盆」一部引用)

「その人を失った悲しみの深さは、実はそのまま、生前その人から我が身が受けていた贈りものの大きさであったのです。かけがえのない大きなものを贈られていたからこそ、その人を失ったことが、深い悲しみとなって追ってくるのです。」

(宮城巖「仏弟子群像」より)

「私たちは大切な人を失った時こそ、人間として大切なことに目覚める時としなければならぬのではないのでしょうか。それが残された者の責任でもあると思います。そして、亡き人との出会いなおしは、そのまま真実の自分自身との出会いなおしであると思います。亡き人の前に座りなおしたいものです。」

また宮城先生は別のところで、このようにも言っておられます。

「私は私としてすでに存在し成り立っていて、その私にまわりの人々と関係をもつ、というのではなくて、まわりの人々との関係においてはじめて私が成り立っていくのである。現に出会い、関わっている人々をこそ、自分の命の具体的な内容とするものなのである。私のうえに成り立っている関係のすべてを切り捨てた私自身などというものは、まったく無内容なものでしかない。」

「人は関係し合って生きています。関係と関係の中に人は居ると言っても良いのかもしれませんが、その関係に、迷い悩みます。」

『「いま」と「これから」を大事にしたいから、大いに迷おうかと思っている。』

（早川一光の「こんなはずじゃなかった」より）

「とこの言葉もありました。考えてみれば、迷うということとは「いま」と「これから」を大事にしたいからだということなのです。大いに頭をひねり、迷っていったらよいのかもしれませんが。」

「息を引き取るという」「というのは、
私たちが

「その吐息を引き受ける」こと

（川村妙慶「東京真宗同朋の会 報恩講」より）

○ 相変わらず新型コロナウイルス感染の問題が世界中を覆っています。ワクチンが開発されない限り、注意して生活するしか方法はないのだと思います。酒井義一氏（浄土真宗の僧侶）は南御堂（大阪別院の新聞七月号）で、ハンセン病問題を通してこの問題を考えて「排除すべきは菌であるのに、必要以上に人間を排除しようとしたのです。感染者やその家族、医療従事者に向けられた冷たいまなざしの根底にあるのは、恐れや自分を守るといふ心ではないでしょうか。」と、その人と病気をきちんと区別して考えなければならぬということ指摘しておられました。また「感染者は数字で発表されています・・・その向こうには名前を持った一人ひとりの人間がいて、苦しみや悲しみや辛さがあるといふところまで見えてきません。ひとくくりにすることによって、そこにいるひとりの人間を見失っていくのです。」と書かれていました。その人の苦悩に思いをはせることが出来る人でありたいとまた思います。正に自分自身に注意してみていかなければならないと感じました。そして最後にそこには「人間の闇を凝視する浄土真宗」という言葉がありました。人は自分の闇を見失った時に大きな間違いをするのかもしれないと思いません。仏さまの前に座りつづけなければならない存在だということだと思えます。

○「・・・苛立ち不安を感じ、そして時としてあまりのつらさに自分の抱えているすべてを投げ出したくなるような衝動にかられることがよくありました。そんな自分を持って余していたときに、信頼できる先生に半ば愚痴のような形で相談をしたことがありました。すると先生に次ぎのように言われました。「何よりもまず自分自身に向かつて、ここまで頑張ってきたねと、労いの声をかけてあげてくださいね。それを他人に求めてはダメですよ。あなたがあなた自身に向かつてですよ。ただ、どうしても自分でも声をかけてあげることができないときはあなたに代わり私が声をかけますから」気がつくところから涙が頬をつたって流れ落ちていました。不思議な涙でした。とてつもなく深いところから流れ出てきた「地下水」のような澄んだものに感じました。あれは一体誰の涙だったのでしょうか。いまも考え続けています。」
（花すみれ 令和2年 7月号 武宮賢紹 より）
お盆は、今一度静かに自分を振り返る時でもあると思います。人は頑張りすぎてしまうということがあると思うのです。問題はそのことに自分ではなかなか気がつけないということではないでしょうか。

・忠峰コーナー

「鮮やかに 緑さわやか 歌登」

「万緑や 先祖の墓に 花供えて」

真宗大谷派 摂晃山 順信寺
じゆんしんじ

〒098-5206 北海道枝幸郡枝幸町歌登西町120番地
TEL : 0163-68-2426 FAX : 0163-64-7755
E-mail : Kamuro19890830@gmail.com

Facebook Twitter YouTube

▶ <https://www.jyunsinji.jp>

